

アジア太平洋ホリスティック教育ネットワーク (APNHE)

第5回 ラウンドテーブル国際会議 報告

野沢 綾子 (教育学博士)

去る2017年11月23-25日、タイ・バンコクのチュラロンコン大学にて「価値観の学び」(Value Learning) をテーマに、アジア太平洋ホリスティック教育ネットワークの第5回ラウンドテーブル国際学会が開催された。多数のタイからの参加者に加えて、香港、ブータン、マレーシア、オーストラリア、カナダ、アメリカ、日本から、200人ものホリスティック教育者が集う堂々たる大会となった。オーガナイザーのアソムシン学院 (大学院) とルンアレン校の創立者であるプラパーパット・ニヨム准教授の挨拶の後、舞台の袖で静かに待っていた地元の幼稚園生が生き生きと動作瞑想を披露すると、会場全体が大きな笑顔に包まれた。

今回の基調講演者は3名。はじめにタイのワット・ボヴォラニヴェス王立僧院のプラ・シャキヤヴォンスヴィスディ博士が、ケンブリッジで学んでいた時、教授がいかにか生活の中での自分のあり方が学びの原点になるかを指南したというエピソードや、NYの国連の会議にて、持続可能な社会を説く前に自分たちの生き方はどうなのかと招待してくれた人々を前に水を差したなどの武勇伝を交えながら、仏教の教えがいかにか価値の学びの基盤となっているかを話した。ブータンの国民総幸福に沿った教育改革の立役者となった元教育大臣・現ティンパー大学学長であるタクル・シン・ポウデル氏は、現在のグリーンなブータンのためのグリーン・スクールについて、何層にもわたる同心円を使いながら、その概念について話した。トロント大学のジョン・ミラー教授も全てのものが繋がっているのに、教科がバラバラに教えられることはイリユージョンであること、そして、信頼、愛、神秘、喜びの4つを元にしたホリスティック教育について語った。

そのほかのパネラーも、現同志社大客員教授でヴァーモント州のセント・ミカエル大学のエオストラ・ジョンソン教授 (数々のオルタナティブ校を設立し、コロラドのナロバ大学の観想的教員養成課程設立のきっかけとなった)、ホリスティック教育センターの新設が決定した南オレゴン大学のウィリアム・グリーン教授、タイ公衆衛生省にてマインドフルネス・カリキュラムを学校や病院で教えているヨンギョッド・ウォンピロンサーン博士、生徒たちのイニシアティブを生かしてビジネス的な思考もどんどん取り入れるという教育を続けてきたリーダー、バンコクのインターナショナル・スクールの学園長など多岐に渡り、活発な意見交換がなされた。基調講演の際もパネルディスカッションの後も、フロアーでは小グループに分かれて、200人全員が参加。ホリスティック教育をおこなうのに現状とのギャップが大きく失望するという流れになった会場で、ミラー教授やジョンソン教授が「始めた頃に比べれば、こんなに大きな会議が開かれ、多くの教育者が意識を持って実践が広がっていることこそが広がっている証拠で、私は大いに希望を感じている」といったコメントをしたことによって一挙に会場の雰囲気を変

わったことを体験し、教育者の存在が何たるかを知らされた思いだった。

ワークショップもラウンドテーブルも体験的セッションも、オーガナイザー自ら「こんなに国内にホリスティック教育者がいたのかとびっくりした」というほど、タイからの熱心な実践が続々と報告された。私も第一回大会を開催したマヒドン大学の観想教育センターの発表、ホスピス患者ケアのボランティアをする学生の学びに関するリサーチの発表、学外で青少年の多彩なコミュニティ・プロジェクトを推進するプログラムの発表、そして観想教育を取り入れる幼稚園教員による体験セッションに参加した。広島から平和教育を長らく実践してきた二人のベテランの中学校教員、角崎裕美さんと横山元晴さん、幼稚園教育における茶道の意味と茶道体験を行った石川県の星稜大学から福井いつこさん、そしてアイダホ州のセイジ・インターナショナルスクールでホリスティックにアートを教えるリンダ・ブッチンスキーさんの自分の内面につながるコラージュなどのセッションにも、座りきれないほどの参加者が集まっていた。

圧巻は幼稚園から高校生までの12年間ホリスティック教育を実践するルンアルン校の見学であった。竹をつかった大きな入口のホールに続く陶芸のスペース。池を見ながらここでアートをするだけで瞑想状態になってしまうだろう。こんなところで学ぶと人生が変わるだろう。建築を含め、学びの環境がどれだけ大切かを物語っている。学内はアヒルがのんびり散歩している。小学生のプロジェクトに使われる田んぼ、細かく分別するリサイクルセンター、自分たちが計画から料理までする学校給食の台所。高等部のプロジェクトをサポートするセンターではジーンズのリサイクルなどの展示がしてあった。生徒たちが自主的にテーマを選び、先生はサポートするという形式の学びから、学校の浄水システムを自分たちでリサーチして作り上げた12年生の生徒たちが、そのプロセスを嬉々として流ちょうな英語で話してくれた。これこそが学びだと感銘を受け、私も含め「ここに来てみたいと思っていたのが、やっと叶った」という参加者も、20年間タイのホリスティック教育の先駆者としてリードしてきたルンアルン校やアソムシン学院の揺るぎない教育方針と、子どもたちに与えるその影響力の大きさを感じとった。アート作品の展示会では、プロの作品と見間違えるような、11年生による亡きタイ国王に捧げられた塔の細かいスケッチや、何枚かの片目の猫の絵を描いていくことで哀れみから凜とした強さへの尊敬に変容した過程を書き留めた作品など、どの作品もその表現力の深さに、この学校で織りなされている教育の確かさを感じた。そして夕方には引き続き、「良いことがたくさん起こるように」という祈りとともに細いひもを腕に巻いていく儀式が行われ、保護者や教師が用意してくださったタイの地方ごとの美味しいご馳走と、生徒による音楽と舞踊の数々が繰り広げられた学校のレセプションで一日が締めくくられた。

会議の最終日の午前中に私のコネクションプラクティスの発表があった。アメリカの大学の教員養成課程で教えたり、タイの仏教的な青少年育成のプログラムを行ったり、タイ各地で初等から高等教育に携わっている人など、様々な教育者が30人近く集まった。その理論や背景とともに、広島の中学校の英語で120人が学んでいる実践、千葉の教員研修に取り入れられた実践、

またオリアンダープロジェクトという平和教育を学びにきた北アフリカ・中東の30人の教育者のことや、アメリカを中心にした北米の20人の教育者のこと、広島市の平和文化村の分館での学習など、教育分野での広がり以外にもビジネスや病院、コーチング、カウンセリングなど、日本でも多岐にわたり取り入れられているコネクションプラクティスの実践の様子を紹介した。さらに体験的に自分の感情とニーズにつながり、共感力を深めていくワークを行った。こんな具体的な手法は初めてだと、参加していたアソムシン学院の教員がぜひ深く知りたいということで、後日呼ばれて35名の教員（中等・高等部の教員や12年生の参加も含め）を対象にコネクションプラクティスをお伝えすることになった。共感の連鎖が教育分野で国を超えて広がっていく手応えを感じた。

最後の全体のプレゼンテーションとなった、4人のブータンの高校生たちのアソムシン学院での体験は会場を大いに沸かせた。ブータンの現状を冷静に分析し、持続可能な農業はグリーンな政策として国にとっても必要だとしながら、自分たちの決して楽ではなかった農業体験を、ユーモアを交えて語っていた。皆に笑われながらも、毎回お化粧をし、身なりも整えて農作業に出かけていた女生徒が、汚い、きついというイメージのある農業では若者が離れるばかりで、もっと皆が参加したいと思えるためには「ファッショナブルな農業に変えてみせる！そしてそこから将来オーガニックな化粧品を開発する夢を実現します！」との宣言に会場から大喝采。ブータンの未来は明るい、と胸のすく思いだった。絶妙な司会コンビが会の進行をし、それぞれのプレゼンテーションの間には、タイの国民的な伝統音楽の演奏と詩の朗読、皆でバンブーダンスなどの趣向が凝らされ、タイらしいおもてなしを受けた。最後にはオンラインで会場を巻き込んだアンケートが行われ、全体写真で会議が終了した。

その後、1万人が並んで入るといふ、亡きタイ国王の葬儀に関する展示場では、国内各地でコミュニティプロジェクトを70年間続けた国王の経歴を知り、ここまで国民全員に慕われた理由がよく理解できた。妃殿下も伝統芸能の保護プロジェクトに熱心で、伝統が守られているこの国を見るにつけ、日本で伝統芸能を大切にしている教育がされていないことへの一抹の危惧を感じたほどだ。どの国でも点数主義や短絡的な教育が行われている現実がある中で、ホリスティックな教育が大事だと、同じように切磋琢磨する教育者がいること、それが世界中に広がっている共通認識ができて心強く思えた。北米での学会とはまた雰囲気の違い今回のアジアでの国際会議で、文化にホリスティックなものが根付くアジアでの教育に特有なものを感じ、ますます目が離せなくなった。次回第6回のアジア太平洋のホリスティック教育ネットワークの大会はお膝元日本、同志社大学にて3月末に開催される。観想教育がテーマで、ぜひ日本からの教育研究者・実践者を始め、興味のある全ての方の参加を期待したい。